

漢代の騎射狩獵圖紋に就いて

原 田 淑 人

(Dr. B. Laufer: Chinese Pottery of the Han Dyna-

支那唐代の織物その他の工藝品に騎射狩獵圖紋

があつて、馬が前後四脚を充分に張り擴げて所謂

飛走 (Flying gallop) の姿勢を取るものが少くない

ことは何人も知るところである。而してそれがサ

ン朝波斯 (296—636 A. D.) の圖紋と關係のあるこ

とも考へられたのである。然るに此種の圖紋は必

しもサ、ン朝波斯の圖紋の影響を受けて始めて支

那に出現したのではないのである。此問題に就い

ては夙にラウフェル博士がその著支那漢代の陶器

sy. Leiden 1909.) に於いて論斷されたことがあ

る同氏は漢代の陶器に見える浮彫の騎射狩獵圖象

(挿圖一はその一例) をトルコ族の美術から採用したも

のとして、先づ史記趙世家の武靈王が胡服を服用

し、舊來の車戰法を改めて乘馬隊を編成したこと

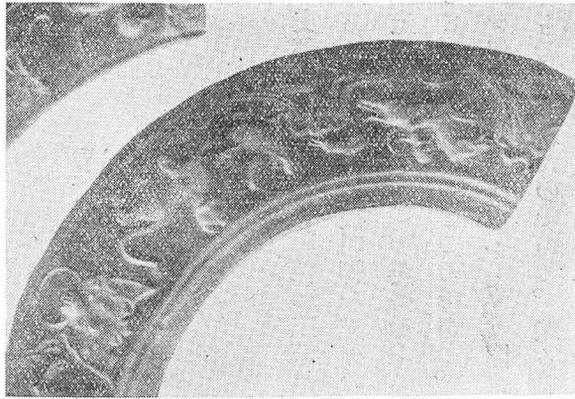
が支那に於ける騎射の始で、騎射は決して支那固

有の習俗でないことを説き、次にクラスノヤルス

クに近い古墳から發掘された甕やユス河並にイエ

ニセイ河畔の岩石に描かれてゐる騎射狩獵圖は支

那漢代の陶器に見えるそれと騎射の姿勢が全く同一であり、且つ支那漢代の陶器に見える騎手並に



怪物がシベ

リアの遺物

に現はれて

ゐる細長く

尖がつてゐ

る所謂スキ

チア帽子を

戴いてゐる

とを示摘し

てゐる。即

ち支那漢代

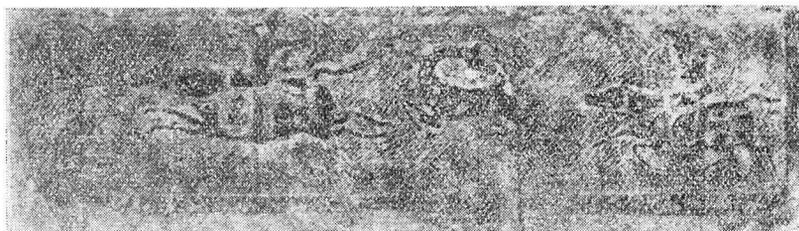
の騎射狩獵

圖の意匠は

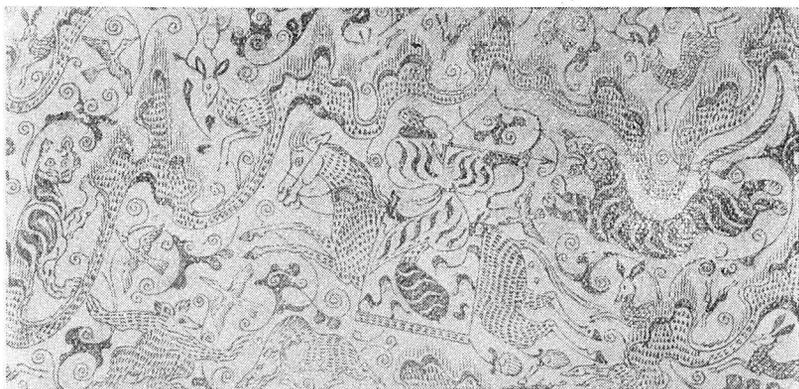
スキチア又は古代土耳其（同氏は匈奴をトル族

と見做してゐる）の美術品から取つたものである

ことを推斷されたのである。又サ、ン朝波斯の美術品に見える同一の意匠もサ、ン朝以前の狩獵圖には決して現れない、是亦スキチア又は古代トルコの美術品から流入したもので、露都博物館所藏のサ、ン朝時代の銀鉢及び獨逸ケルン博物館所藏の織物はその好適例とすべきものであり、殊に後者の騎手がスキチア帽子を被つてゐるのは動かぬ證據であることを述べてゐる。余輩は嘗て此論著を讀んだ時に、同氏の推論に敬服したものゝ、氏の擧げた漢代の陶器が漢式には相違ないが、その狩獵圖が餘りに流麗巧妙であるところから、或は六朝頃の製作に係るもので、是又波斯サ、ン朝の藝術に影響されたものではないかと一部の疑念を殘してゐたのであつた。然るに近年確かに漢代の作品と思はれる遺物に此種の騎射狩獵圖が陸續發見されたので、以下その一一に就いて記述して以て氏の所説に裏書したいのである。



第 二 圖



第 三 圖

河南省登封府にある少室廟闕は開母廟闕と共に後漢延光二年 (192 A.D.) 頃の建立と推定されてゐるが、その畫象中に插圖二の如き狩獵圖が見える。即ち二人の騎手が鹿状の一獸を射てゐるが、前方の騎手はフライング・ギャロップの姿勢に馬を飛ばし顧みて矢を放つてゐる。他の畫象石に現はれてゐる狩獵圖とは全く趣を異にしてゐる、插圖一と同一の意匠たること明かである。

三

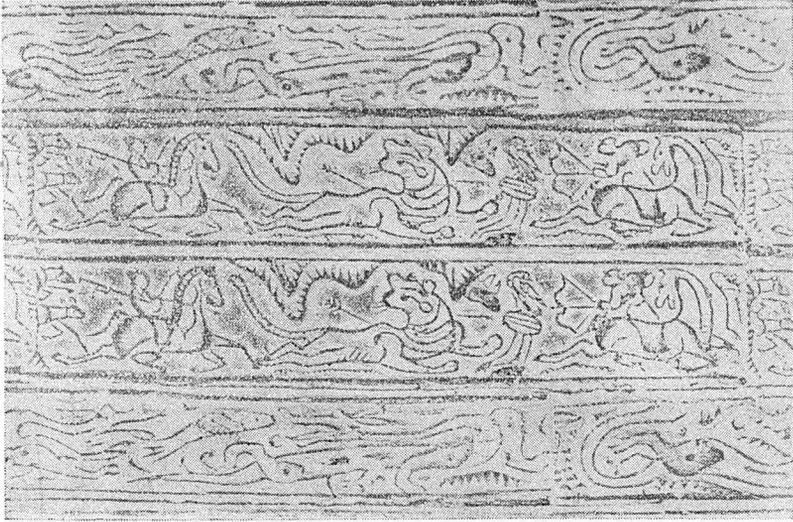
樂浪郡遺蹟から發見されて近頃東京美術學校の所有に歸した青銅製筒形金具がある。此金具は當初全身青鏽を以て蔽はれ、僅かにその一部の金象嵌が現はれてゐたものであるが、同學校の小場恒吉氏が丹念に青鏽を剝落せしめた所、四節とも金色燦然たる

象嵌圖紋の施されてゐることが見出され、同君の熱心なる努力により、各節に見える人物禽獸等の圖紋の精確な摸寫が出来たのは慶賀に堪えぬところである。第三圖はその一節の摸寫圖で、同君の快諾を得て茲に引用することを得たのである。人物はこの一節に一人だけ現はされ、他の節は諸種の禽獸に限らず布置されてゐる。今狩獵圖象を最善く示してゐる挿圖三にのみ就いて見ると、先づ帶狀に連亘してゐるのは山であつて、挿圖一に見えるる山の連續した形であり、更に挿圖五に見える山と比較すると、その頂上に沿うて施されてゐる毛狀の細線は草を意味するものであるとが首肯されやう。鳥首狀に現はされた樹木とも雲ともつかぬ圖紋は漢代の畫象石やスキチアの押出紋金具に多く見えてゐるものである。騎手は虎皮の着衣と皮製の帽とを被て猛虎を顧射してゐる。此帽子は所謂皮弁であるが、全圖がスキチア意匠から脱化

して支那式になつてゐる結果、スキチアン帽子がその形を改めてゐるものと見られるのである。支那上古狩獵の際被る皮弁も或は北方民族からの影響であるかも知れぬ。此狩獵圖紋は流麗且雄健な線を用ゐる而かも寫實的な分子が多いのは驚くばかりである。挿圖一の陶器の圖紋も漢代に作られたものであり得るのである。此金具は何に使用されたものか明かでないが、王莽時の年號銘のある漆器と併出したといふことである。

四

支那古代墳墓を築造した大きな空洞埴に種々な畫象が彫刻されてゐて、その手法が漢の畫象石に酷似してゐるものが多くある。挿圖四は上海で賣物に出た埴の圖象の一部で、その拓本が京都帝國大學考古學教室に所藏されてゐる。虎を挾んで二人の騎手が現はされ一人は槍を持ち一人は矢を顧射してゐる。此圖にも挿圖三と同趣の山が描かれ



第 四 圖

第 五 圖

である。なほ岩上に止まつてゐる鳥や獸類が見えてゐる。

五

挿圖五はフィッセル氏がその論文支那上古の彩畫



陶器 (Mr. H. F. E. Visser : An early Chinese painted Vase The Burlington Magazine XLIX, December 1926.) の中に圖示された和蘭レーズのブレン

ルク氏所藏の支那素焼陶器である。その器形は高臺附の壺であるが、所謂鍾と名づくべきものであらう。その肩部二段に菱形の雷紋つなぎが現はされ、口縁部には直線波状紋が施され、又胸部下段には便化された蟬紋が繞らされてゐる。而して胸部上段には見事な彩畫が描かれてある。挿圖六は同じくフィツセル氏が同論文中に示されたその圖紋の展開圖である。同氏の説明によると、土色は鼠色を呈し、一旦白塗し、その上に黒色灰色及び赤色の狩獵圖が描き出されて居り、而して轆轤痕の第三輪節の下部並に高臺は赤色に彩られてゐるのである。その圖様は連亘してゐる山が帶狀に現はされ、諸處に草を配してゐる襦袴を着け靴を穿き所謂スキチアン帽子を戴き馬をフライイング・ギアロップの姿勢に走らせ弓を引いてゐる。そして獸には鹿虎猿犬等が山の上下に配置されて居る。その年代に就いてフィツセル氏は唐以前の

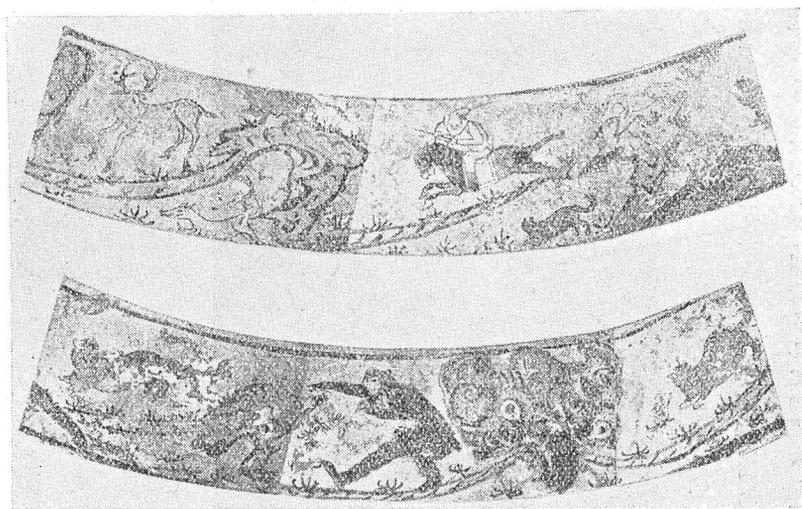
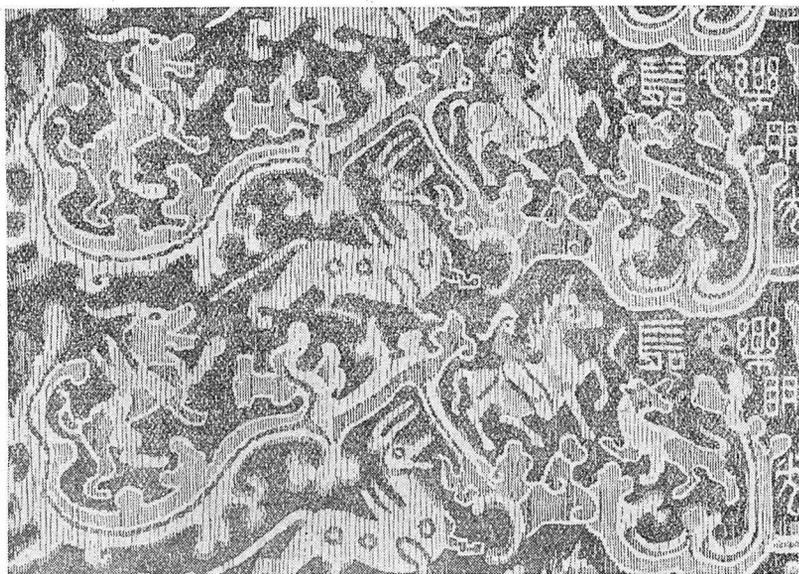


圖 六 第

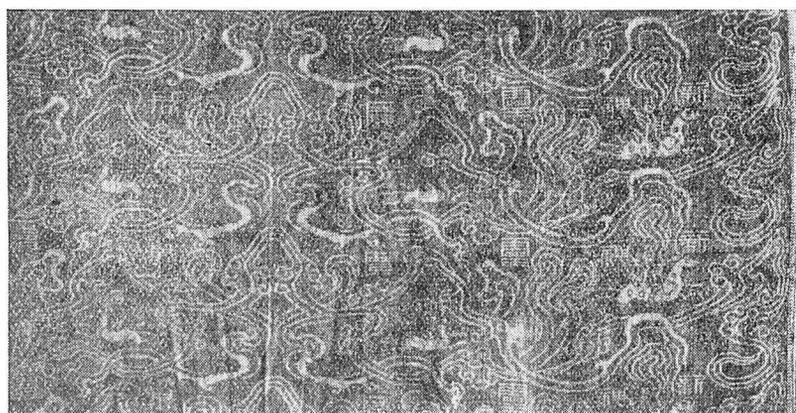
陶器としてその確定を未來の研究に俟たれてゐるが、その器の形式そのものや獸環など明かに漢式であり、幾何紋も亦漢代の様式に相違なく圖象も他圖と比較し、又樂浪漆器の紋様に想到すれば漢代の繪畫として差支へないと思ふのである余輩が此の小篇に引用した他の圖象が器物の彫刻や織物の紋様で、多少手法が堅いのに對し、之は眞の繪畫であるから筆意の軟味が認められ、漢代人の狩獵圖象の描寫法を善く味なふことが出来るのである。

六

余輩は最後に漢代と思はれる織物に見える狩獵圖類似の圖象を二個示したのである。挿圖七はスタイン博士が樓蘭地方の古墓から發見したもので (Mr. F. H. Andrews: *Ancient Chinese figured silks excavated by Sir Aurel Stein. The Burlington Magazine, July, 1920*) 青藍色の地合に濃淡の革色



第 七 圖



第八圖

並に赤褐色を以て騎手の鹿及び怪獸が織り出されて居る。又織出しの中に連亘して人物や獸類を圍んでゐるのはアントリユース氏が雲紋と見做したの無理ではないが、余輩は前記の諸例

に據つて之を便化された山ではあるまいか少くとも山の描寫と類似のあるやうに考へるのである。又長樂明光とある文字は漢式鏡のそれに類似して此織物の漢代の製作に屬することを明示してゐるのである。此圖象は必しも狩獵の意義は無いにしても狩獵圖象と同類のものである。而して最面白いのは此馬の鬣が三ヶ所に束ねられてゐることである唐代の馬が此式の裝飾を取り、それが三花又は五花と呼ばれたことは余輩の嘗て考證したところであるが(東洋學報卷二第一號昭陵の六駿像に就いて)、その後ルロック博士はサ、ン朝波斯の銀鉢及び龜茲遺跡發掘の壁畫に同様の三花五花の馬鬣飾が見えてゐることを記るし、なほイエニセイ河畔岩石に彫刻された騎馬武士の圖の三花馬鬣をも圖示してゐる (Dr. A. von Le Cog: Biederatlas zur Kunst und Kulturgeschichte Mittelasiens. Berlin 1925. fig. 32. 33. 34. 99. n. 100.)。後者に就いて

はラウフェル氏はその年代をシベリアの鐵器時代で、支那漢代と同時代のものと推定してゐる (Dr. B. Laufer: Chinese Clay Figures. Part I. Chicago 1914. P. 322.)。思ふに此式の馬鬣飾も元と北方古民族の習俗の流入したものであらう。

挿圖八はカズロフ氏が外蒙古肯特山附近の匈奴の墓と思はれるところから前漢式の漆杯と一處に發掘した織物の一である (Mr. W. P. Yetts: Discoveries of the Kozlov excavation. The Burlington Magazine. April, 1926.)。前圖と略その巧を同うしてゐて、新神靈廣成壽の文字が織り出されてゐる流雲のやうな圖紋は恐らく山が便化されたものであらう。人物はフライング・ギャロップの姿勢に馬を飛ばしてゐる。

七

以上擧げた諸例は何れも皆漢代の遺品と考定さるべきものであつて、明かにスキチア式騎射狩獵

の意匠表現が認められる。所謂スキチア民族に就いても、又匈奴民族に就いても學者によつて民族論が異つてゐやう。併しながら漢代支那民族と密接な關係を有つてゐた匈奴にスキチア支那兩文化の流入してゐたことは、カズロフ氏の發掘の結果明確になつたのであるから、漢代の騎射狩獵圖紋が北方民族の影響に因るといふラウフェル博士の説も信憑され得るのである。